

教育長 様

校番 095 福山商業 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和5年度 実施報告書****1 学校の教育目標等**

(1) 教育目標

ビジネス教育を基盤に、豊かな社会づくりに挑戦し、貢献する、自律した人財の育成

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

【自律】自分の意見や考えをもとにして、物事を判断し、行動することができる。

【挑戦】目標に向かって現状や自己を認識し、主体的に行動することができる。

【貢献】自分の役割を認識し、他者の意見や考えを受け入れ、協働的に行動することができる。

(3) 学科等の特色

本校は、広島県東部のものづくりの都市である福山市に位置し、昭和39年に開校し、校訓「誠実・自主・創造」のもと、約1万3000人余の同窓生を輩出し、数多くの同窓生が実業界の中核でその優れた力量を発揮し、経済界をはじめ社会を支える人材として活躍している。

本校は、これまで「流通経済科」、「情報ビジネス科」の2学科（小学科）を設置し、生産者から消費者への商品やサービス、情報の流れなど流通についての専門的な学習を通してビジネス分野で活躍する人材や、情報処理に関する専門知識とコンピュータ技術を学習し情報社会に適応できる人材を育成してきた。

令和4年度入学生からは、県内4校の商業高等学校で既存の小学科を統合し「情報ビジネス科」に学科改編したことを受け、次のように教育課程の編成を行っている。

- 1年次では、将来、社会の多様な分野で活躍するための基礎・基本を習得させるために、必須教科科目、専門教育系科目を中心として、知識・技能やビジネスを学ぶ意欲、人間性などを習得させる。
- 2年次からは、進路希望や適性に応じ4つの類型（情報スペシャリスト、会計・金融エキスパート、地域マネジメント、コミュニケーションマスター）に分かれ、ビジネス分野における高度な専門性を要する職業等に必要の資質・能力を習得するために、必須教科科目、専門教育系科目に加え、その他必要とする選択科目を体系的に編成し、ビジネスに関する基礎的知識・技能を習得させる。
- 情報化・グローバル化等に対応できるよう、3年間を通じた情報教育を推進し、時代の変化や社会の変化に対応する教育を推進する。また、多様な進路や適性に応じたキャリア形成支援のための講義、演習、実習等を適切に組み合わせた授業を開講する。
- 3年間を通じて課題解決型の学習を展開するとともに、地域との連携を広く学習の機会と捉え、社会人講話やフィールドワークも取り入れながら、豊かな人間性を育み、他者と協働してプロジェクトに取り組む資質・能力、社会性をもって主体的に地域社会や産業界の発展に寄与できる人材を育成する。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

商業を中心に系統立て、それぞれの教科で資質・能力を育成するよう次の視点をもった内容を展開する。

◆ 生徒に身近な題材として「生きる」「生活」「社会」を扱い、生徒が興味・関心や憧れをもつ題材をテーマに「探究」していく。学びのきっかけとして教員等が課題を設定する場合も考えられるが、あくまで生徒の能動的な学びを基軸とした内容とする。

◆ 商業人としての自己実現プロセスを経験できるよう、実社会に参画するために求められる「実態を見極

め、自身だからこそその思考・判断・表現をする」思考プロセスを構築していく。

- ◆ これらの学びが各教科で系統的な学びとなるよう、これからの社会で求められる資質・能力を段階的・効果的に育成するための3年間の系統的なプログラムを構築していく。
- ◆ 探究学習における地域課題の設定にあたっては、地域の実態を踏まえることはもちろんのこと、生徒の主体性に配慮し、生徒自身が「問い」を発見することができる「真の探究」につながるよう、教師のファシリテートに基軸を置いて生徒の自由な発想が尊重されるよう留意していく。

(2) 1年後の目指す学校の姿

商業科の特色を生かしたカリキュラムの開発における手立てにより、教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた、新しい時代に応じた学習カリキュラムの構築を行うなどの組織運営体制が構築され、教育課程編成・実施の改善に向けたPDCAサイクルが確立されている。

地域に根ざしつつ様々なフィールドで活躍する人材が育成されるよう、学科改編に伴って行われている類型選択において適切な科目の設置と生徒の進路と適性に応じた適切な選択がなされる仕組みが構築されている。

また、教員間で「自律・挑戦・貢献」に係るマスタールーブリックの共有が図られ、核となる「探究活動」が深い学びになるよう各教科・科目で授業が展開されている。

(3) 令和5年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・コアカリキュラムと各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。
- ・「マスタールーブリック」と各教科・科目とのつながりを示すイメージマップが作成されている。
- ・学校として育成を目指す資質・能力について、教育活動の成果検証や重点目標と評価指標の整合性の確認、評価指標の見直しがされている。
- ・学校組織として解決すべき課題の焦点化、重点目標の再設定がされ、学校グランドデザイン、学校経営計画等のPDCAサイクルが確立されている。
- ・マスタールーブリックを活用し、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・学校生活アンケートにおいて、「学んだことを自分の人生や社会に生かそうとしている」と感じている生徒の割合が90%以上になっている。
- ・学校生活アンケートにおいて、「学校生活に充実感を感じている」生徒の割合が80%以上になっている。
- ・学校生活アンケートにおいて、「多様な意見を集約し、自分の意見として表現できる」生徒の割合が70%以上になっている。
- ・マスタールーブリックによるそれぞれの項目で評価結果がレベル3以上（4段階の上から2番目）である生徒の割合が70%以上になっている。

(4) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

- 1年次：「ビジネス基礎」（通称「ビジネス探究」）
- 2年次：「ビジネス探究E E」（学校設定科目）
- 3年次：「課題研究」「総合的な探究の時間」

イ カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）カリキュラム開発に先んじて、マスタールーブリックを見直した。「自律」「挑戦」「貢献」の資質・能力を定義し、それぞれの項目のレベルを揃えた。昨年度末に生徒会生徒を中心に、生徒スローガンを作成した。具体的には、「自校の良さ」「自校に足りないところ」「どのような学校にしたいか」「卒業までに身に付けたい力は何か」について生徒にアンケートを実施し、その回答をもとに生徒会で「互いの良さを引き出し合う学校～挑戦が経験になり、学びを深める生徒～」というスローガンに決定した。生徒指導上の課題がある本校で、生徒の行動の変容を促すために、生徒主体で目指すべき姿を共有するという基盤を据えた。

また、授業については、「学ぶ楽しさを実感できる50分間を共創する～生徒がワクワクドキドキする授業作りを目指して～」を今年度のテーマとして、教職員研修で周知し、昨年度に引き続き、「授業改善」をキーワードに学校全体で育成を目指す資質・能力を育成するための土台作りに取り組んだ。教科主任会議も定期的に開催し、授業評価アンケートの項目の見直しや各教科の評価の在り方を検討した。令和6年度のシラバス様式も検討し、計画的に指導を進められるよう変更するとともに、生徒にとっても指導と評価について分かりやすく

なるよう改善した。教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた、新しい時代に
応じた学習カリキュラムの構築に向け「評価の在り方」を中心に教職員研修を実施した。

(ミクロ) 学校の教育目標や育成を目指す資質・能力の育成に向けて、「課題研究」と「総合的な探究の時間」
を核として「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、カリキュラム開発を行った。具体的には、生徒の興
味・関心や個性に合わせ、①地域の課題発見・解決を行う「ビジネスアイデア講座」、②企業から受けた課題を
解決する実践的な「企業課題解決」、③個人の「興味・関心による探究」の3つのグループに分かれ、探究学習
を進めた。特に今年度は、地域の企業7社と連携し、課題の設定、仮説・検証等を企業訪問や中間報告会で企
業の方々から指導・助言を頂きながら、実社会と学校の学びを結び付ける探究学習を展開した。また、探究学
習を始めるにあたり、「マイプロジェクトアワード」(認定NPO法人カタリバ主催)の全国大会に出場した大学
生が実際に高校生の時に行った探究学習についてプレゼンテーションを行ってもらうなどモデルを示すこと
により、「学習成果発表会」に向けて、ゴールまでの道筋を提示した。

核とするカリキュラムを充実させるに当たり、外国語科(英語)において、昨年度設定した1年次・2年
次の到達地点を目標に取り組むとともに、コアカリキュラムで身に付けさせたい資質・能力や授業の特徴を考
え、「自分の考えを整理し、自分の言葉で表現(言語化・発表)する。」ことを意識しながら、パフォーマンス
課題等を設定した。また、日々の授業でも、個人ワーク、ペアワーク、グループワーク、全体共有(発表)を
繰り返し行うなどのマスタールーブリックの「自律」「挑戦」「貢献」を意識した取組を行った。

ウ 校内体制

昨年度に引き続き、管理職・教務主任・生徒指導主事・教育改革推進部主任・副主任・商業科主任で構成さ
れる教育改革推進委員会を定期的に開催し、カリキュラムマネジメントを含めた教育内容を検討する体制を整
えた。

1学年の「ビジネス探究」、2学年の「ビジネス探究EE」、3学年の「課題研究」は商業科目であるため、
実際のカリキュラム開発は商業科を中心に行ったが、年度当初に各教科でもコアカリキュラムやマスタールー
ブリックを意識した授業を展開するために、今年度のカリキュラム開発について全教科に周知した。また、教
科主任会議を定期的に開催し、「評価の在り方」、「定期考査の在り方」についての共通認識をもつととも
に、3学年選択科目の設置について、生徒の進路状況に応じた選択ができるように、各教科で協議し、それを踏ま
えてカリキュラムを変更した。

また、育てたい生徒像を意識し日々の教育活動を行うため、昨年度に引き続き、「授業改善」をキーワ
ードに、「目標と指導と評価の一体化」のための教職員研修を実施した。

(5) 学習評価

1学年の「ビジネス基礎」では、毎時間ルーブリックによる評価を実施し、生徒の状況に合わせ指導の工
夫を図った。また、生徒自身で学びを言語化したり、ルーブリックによる自己評価したりするなどを行った。
2学年の「ビジネス探究EE」では、単元末の発表等を通して評価を行い、必要な支援を行った。また、振
り返りシートを活用し、言語化することにより、生徒自身によるメタ認知を促した。3学年の「課題研究」
+「総合的な探究の時間」では、生徒・教員ともに進捗状況を把握し、計画的に探究学習を進められるよう
に「課題研究のあゆみ」を作成し、必要に応じて指導・助言を繰り返した。また、連携企業を招いた中間報
告会を実施し、生徒の状況を見取りながら、連携企業の指導・助言も受けつつ、担当者間で状況を共有し改
善に結び付けた。

(6) カリキュラム評価

学校生活アンケートにおいて、「学んだことを自分の人生や社会に生かそうとしている」と感じている生徒
の割合は、昨年度の88.1%から94.5%に上昇した。また、「多様な意見を集約し、自分の意見として表現で
きる」生徒の割合は、昨年度の66.1%から76.2%に上昇している。さらに、「学習の意図や目的を理解して
いる」と感じている生徒の割合は、昨年度72.5%から94.5%に上昇している。このことから中期経営目標に
挙げられている「将来の社会生活との関連を意識しながら、学びの価値を理解し、学習に取り組んでいる」「自
己の社会的・職業的自立に必要な基盤となる能力や態度を身に付け、自分らしい生き方の実現に向け努力し
ている」の生徒は増えつつあると評価できる。

昨年度から始めた「学習成果発表会」後のアンケートでは、探究学習について、1・2年生から「3年生
の発表を聞いて自分が今後どんなことを考えて発表するのが分かったし、自分のためになる話が多くてい
い経験になった。」「何事も最後まであきらめないように強い心を持ちたいと思った。」「身の回りをちゃんと
見ればまだ足りないことや改善すべきところがあることに気付いた。」「SDGsに関連する内容について探
究したい。」「もっと普段の自分の生活の中に気付きや関心をもって過ごそうと思った」という意見があっ
た。

また、「今回の発表会が、現在学習している「ビジネス基礎」「ビジネス探究EE」の今後授業を受ける上

での参考になったか」の間に 82.3%の生徒が肯定的な回答をした。生徒の学習活動の成果を下級生が受け継ぐ効果的な学校行事となっていることも伺える。「自律」・「挑戦」・「貢献」に関する記述では、1・2年生から「問題を解決するためにさまざまな方法を考えていてすごい。」「挫折してもそこからの巻き返しが面白かった。」「スライドや動画の編集の仕方など各チームの違いがしっかりできていた。」とあった。来賓からは、「壁に当たっても周りの人に助けを求めながら、意見も柔軟に変えながらも目的の方向に進んでいるのが素晴らしい。」「商業高校で学ぶ生徒が日頃授業で学んだ知識をもとに、いろいろな課題を見つけて解決に導こうとしたり、自分の将来を見据え考えをまとめたりする姿は大変素晴らしい。」という評価もいただいた。教員からは、「内容が昨年度よりかなりグレードアップしている。進行も発表も、昨年より随分レベルが上がった。」という意見もあり、探究のサイクルを通して、学びそのものへの前向きな姿勢をもつことができていると考えられる。企業との連携についても「企業と連携して課題を見付けその課題の解決に向けてみんなと協力したいと思った。」「企業と連携して新しい商品を考えてみたくなった。」「地域と協力したい。」といった回答もあり、「社会に開かれた教育課程」を目指し、地元企業との連携を軸に来年度の「総合的な探究の時間」実施に向けたカリキュラム開発の土台づくりはできたと考えられる。

3 令和5年度の成果及び課題

(1) 成果

3年生を対象に1月に実施した学習成果発表会後のマスタールーブリック「自律」・「挑戦」・「貢献」について4月と比較した結果は下記の表のとおりである。どの項目もレベル3以上の生徒が飛躍的に増加した。事後アンケートでは、1・2年生から「スムーズにはいかなかったかもしれないけど、精一杯行動をしていたので良かった。」「司会者が発表を聞いて自分の感想を伝えているのがいい。」という記述が多数見られた。また、3年生では、79%が自分の役割が果たせたと回答。「ところどころ自分たちの考えで動いた。」「原稿なしで自分の伝えたい思いをしっかりと伝えることができた。」という記述も見られた。来賓からは、「入口から控室等での丁寧なアテンド、発表に関わるチームプレーを感じた。裏方として頑張っている方にとっても学びが多いと思う。多くの生徒が考えて行動していた。」という意見もあり、この結果から、自ら考えて行動する生徒が増加し、「チーム福笑」として取り組む体制づくりができていると考えられる。

【3年生アンケート結果】

レベル	自律			挑戦			貢献		
	4月	1月	増減	4月	1月	増減	4月	1月	増減
4	8.9%	28.3%	+19.4%	12.7%	36.4%	+23.7%	22.8%	35.4%	+12.6%
3	45.6%	48.5%	+2.9%	32.9%	41.4%	+8.5%	32.9%	46.5%	+13.6%
2	31.6%	18.2%	-13.4%	35.5%	18.2%	-17.3%	30.4%	14.1%	-16.3%
1	13.9%	5.0%	-8.9%	18.9%	4.0%	-14.9%	13.9%	4.0%	-9.9%

(2) 課題

マイクロレベルでのカリキュラム開発では、一定の成果と方向性を出すことができたが、学校全体としての教育力については課題が依然として残されている。校則に関する生徒アンケートでは、「なぜ校則があるか理解しているか」の間に、「理解している」と回答した生徒は 51.1%にとどまり、「少しは理解している (36.4%)」「どちらともいえない (8.7%)」「理解していない (3.5%)」「あまり理解していない (2.2%)」と続いた。また、学校生活アンケートにおいて「TPOに応じた適切なあいさつや言葉遣いできた」と認識している生徒の割合が目標値 95%に対して、88.9%であった。これらの結果から、一部の生徒ではあるが、生徒の規範意識の低さがうかがえる。教員からも「学習意欲が高くない生徒もおり、授業規律が確立されず、授業が成立しにくい教科・科目がある。」「一部の科目では、積極的に授業改善を行っているが、まだまだ全体として授業改善が進んでいるとまでは言えない。」といった意見もあり、開発したカリキュラムの目標を十分に達成できるだけの学びに向かう姿勢が十分に育っておらず、すべての生徒にとって、適した学習環境になっていない現状がある。

また、「教師とともに学びを進めている」と感じている生徒の割合が目標値 90%に対して 84.3%であった。教員からは「学習意欲の低い生徒を引きつけるだけの効果的な授業内容・教材を提示するまでには至っていない。」という意見もあり、引き続き授業改善に努める必要がある。

学習成果発表会後のアンケートからも生徒指導面として「発表を観覧している生徒の態度があまりにひどかった。」など聞く側のマナーの悪さを指摘する意見もあり、下記アンケート結果の「貢献」で教員と来賓の肯定的評価（レベル3・4）が低いことから「社会形成能力」「自己管理能力」に課題があることが推測できる。

【3年生・教員・来賓アンケート結果】

レベル	自律			挑戦			貢献		
	生徒	教員	来賓	生徒	教員	来賓	生徒	教員	来賓
4	28.3%	10%	0%	36.4%	40%	16.7%	35.4%	40%	14.3%
3	48.5%	60%	71.4%	41.4%	20%	83.3%	46.5%	10%	28.6%
2	18.2%	30%	23.6%	18.2%	40%	0%	14.1%	40%	42.9%
1	5.0%	0%	0%	4.0%	0%	0%	4.0%	10%	14.3%

4 令和6年度の研究目標及び取組内容

(1) 令和6年度の研究目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・コアカリキュラムと各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。
- ・学校として育成を目指す資質・能力について、教育活動の成果検証や重点目標と評価指標の整合性の確認、評価指標の見直しがされている。
- ・学校組織として解決すべき課題の焦点化、重点目標の再設定がされ、学校グランドデザイン、学校経営計画等のPDCAサイクルが確立されている。
- ・マスタールーブリックを活用し、教員による評価及び生徒自身による自己評価がなされ、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・学校生活アンケートにおいて、「学んだことを自分の人生や社会に生かそうとしている」と感じている生徒の割合が90%以上になっている。
- ・学校生活アンケートにおいて、「学校生活に充実感を感じている」生徒の割合が80%以上になっている。
- ・学校生活アンケートにおいて、「多様な意見を集約し、自分の意見として表現できる」生徒の割合が70%以上になっている。
- ・マスタールーブリックによるそれぞれの項目で評価結果が1年生でレベル1以上、2年生でレベル2以上、3年生でレベル3以上（4段階の上から2番目）である生徒の割合が70%以上になっている。

(2) 令和6年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

ア カリキュラム改善の概要

修学旅行やインターンシップなどの学校行事の復活を受け、育成を目指す資質・能力を特別活動の場で効果的に身に付けさせるために、新たに令和6年度より2年次での「総合的な探究の時間」の設置などカリキュラムの見直しを図った。2年次の「総合的な探究の時間」では、「職業や自己の進路に関する探究」や「学校の特色を生かした探究」を行い、3年次では、SDGsの視点をもとにした実社会と学びのつながりを考える探究活動を展開していく。「総合的な探究の時間」は、育てたい生徒像に直接結び付く内容であり、教科を越え、「総合的な探究の時間」で生徒が取り組む意義や目的を十分理解し、各教科での学びを生かして教科横断的に学習活動に取り組めるよう充実させていく必要がある。また、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、より主体的に取り組むことができるよう促していく。学習成果発表会の事後アンケートでは、「企業（社会）との接点を定期的かつ継続的に維持、発展できれば、企業がどんな人材を求めているのか、社会にとってどうあるべきかに気付きやすい。」という意見が来賓からあった。「総合的な探究の時間」を核とした校内での学びが、生徒の進路実現と結び付くよう3年間を見通したキャリア教育の充実を図る必要がある。

また、学科改編の完成年度を迎える令和6年度では、類型別の学びの発表の場として「福笑フェス」を計画している。学習成果発表会がより良い発表の場となるよう、計画的・体系的にカリキュラムを実施していくとともに、類型選択に係る学校設定科目等の充実を図り、「授業改善」に向けた教職員研修で授業力のブラッシュアップに取り組む予定である。

同時に、定期生徒面談の実施や人間関係構築プログラムと称し、思いやりを行動で示せる人間を育て、思いやりのある学校風土・コミュニティを創造するピアサポートプログラムを取り入れる。このプログラムを取り入れることにより、生徒が相互の人間関係を豊かにするための学びと、そこで得た知識やスキルをもとに仲間を思いやり、支える体験を得ることができ、生徒の「自己指導能力」の向上を目指す。

イ 校内体制

カリキュラム開発を全教職員が参画して行うために、教科主任会議・各教科会を活性化させ、各教科の意見を反映させながら、カリキュラム開発を行う。また、引き続き、「教育改革推進委員会」を定期的に開催し、マクロ・ミクロの両側面でカリキュラム開発を進める。

